

---

# 闇人 アント

三一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇人 アント

### 【Zコード】

N3753T

### 【作者名】

三一

### 【あらすじ】

「彼女」が目覚めたのは暗い箱の中だった。白狼に導かれ、彼女は過酷な運命に巻き込まれていく。

## プロローグ 目覚め

人は暗闇の中に光を見つけると、それを「希望」と呼ぶ。それにすがり、いざれは奪い合い、また「戦争」という名の暗闇を呼ぶ。それを繰り返してきた。なぜそれを盲目的に繰り返すのか。それが人の歴史であり、嘗みの一つであるからだ。そうして人は進化し、生き残るに相応しい力を得てきた。

それが真理だというのなら、我々は歴史の分岐点となる。新たな人類の歴史の幕開けである。それが、天から注ぎし大いなる神の御心。

そして、神から生れし子供たちの歴史が始まる。

光が目覚めたその時から、混沌は秩序へと生まれ変わる。

さあ、運命の選択をしよう。

私は長い夢を見ていた。やけに現実味のある夢だった。黒い人影が私を囲んでいて、私の身体には自由がない。目覚めているのに眠つているような感覚を引きずつて、広い部屋で誰かを追いかけた。まるで、自分が野獣にでもなったような。ああ、思い出したくない、悪い夢。

そんな悪夢に嫌気が差して、意識が現実に戻った。いい目覚めではない。目を開けると私はとても狭い所にいた。真っ暗で何も見えない。横になつて、まるで棺桶に入れられているみたいだ。私は確かに自分の部屋のベッドで寝ていたんじやなかつたつけ。おかしいな。もしかして私は誘拐されて監禁されているんだろうか？いつ？誰に？いや、そんなこと考へてる場合ではない。こんな狭いところ、いるだけで気がおかしくなりそう。身の危険もあるし。とにかく、

「こから出なければ。そう思い、目の前の壁に触れた。

「わっ」

ガガガ…という音とともに急に辺りが眩しくなつて思わず目をつぶつた。しばらくして、砂っぽい風が肌を撫でていくのがわかつた。目を開けると田の前には青い空と雲が広がつていて、明るみに慣れない目にチカチカと星が踊つた。明るさに目も慣れてから起き上がるが、周りには乾いた地面が広がつていて、自身のセミロングの黒髪が風になびいては顔を打つ。

立ち上がり、その棺桶から出るとそこにはまるで学校のグラウンドのようだつた。山奥の分校のよつで、山と木々が外側にある。肝心の校舎らしきものは廃校なのかボロボロだつた。自分が出てきた棺桶はどうやら鉄…というか機械でできた「箱」と言つた方がよさそうだ。誰がこんな校庭のど真ん中にこんなものを置いたんだろう。誘拐にしては様子がおかしい。

横には「箱」の蓋が転がつていて、その中には茶色のショルダーバックが一つ置いてある。自身のものかはわからないが、とりあえずそれを肩にかけてから再び周りを見渡した。

「ここは…どこだろ？」

彼女は辺りをキヨロキヨロ見回していくうちに、あることに気がついた。黒いブーツ、黒いジャケット、黒いワンピース。全部見覚えのないものを着ている。

「私…こんな服持つてたっけ…？」

夢をまだ見ているんだろうか。不気味さを感じていると、校舎の方から人の声が聞こえてきた。人はいるようだ。よかつた。こ

「がどこだかやつとわかる。自分がどうしてここにいるのかもわからぬかもしれない。とにかく不安から早く解放されたかった。

「んだよ、やつと開いたと思つたら入つてたの人じゃねーか！」

「誰だよ『金田のものだ』とか言つたバカは

「いいじゃねえか。その代わりに若い女が入つてたぜ」

柄の悪そうな男が10人弱。風貌は不良と曰賊を足しで一一で割ったような…とにかく良い人には見えない。そういう考えていらううちに、彼らはあつという間に彼女を取り囲んでしまつた。さすがに助けてもらえる状況じやないことくらいはわかつた。誘拐犯はこの男たちなのだろうか。

「せつせく中に連れていひせ」

「面倒だ、ここにやつちまおひ」

訳のわからなこまま、絶対絶命のピンチである。走つて逃げようにも、無理な話だ。恐さのせいか彼女は立ちつくしていた。が、なんとか口は開いた。

「あの…」  
「…」

「あん?なんだ、ねえちゃん。ここはなあ、紅蓮系荒賊『ザム』の  
アジト…」

「ああああー…」

「なんだ、うるせえな！」

奥の一人が突然悲鳴を上げた。その場の全員が振り向くと、白くて大きな犬、というか人よりも1・5倍はありそうな狼が人を押し倒し、今にも頭に食らい付く勢いだった。

「お、狼だ！」

「また出やがったぞ……」

周りの男たちが慌てて銃を向ける。

彼女は「どうしてこんなわけのわからない状況に巻き込まれているんだろう」と茫然としていた。悪党に人喰い狼…まるでマンガみたいじゃないか。おまけに「ぐ自然に銃まで出てきた。こんな物騒な世界に住んでいた覚えはないのだけれど。

「こ…の…化け物！」

一人が持っていた散弾銃を引き金を引く前に、白狼は大きく飛び上がった。男たちは偉そうにしていた割には統率もまるでなく、慌ててている。いよいよ夢なんだと彼女は思った。

そして、その狼は彼女の前に降り立つ。狼の眼差しに、不思議と狂気は感じなかつた。

「…」

「え」

気がつくと彼女は狼の頭で身体を投げ上げられ、そのまま背中に乗ってしまった。

「わあつーちよ…」

他の男が銃を構える前に狼は校舎の裏側にある山に向かってあつと/or>う間に走り去った。倒され、泡を吹いて氣絶している一人を除いて、男たちは立ち尽くしていた。

「あのクソ狼…また出やがった…！」

「しかもせつかくの女まで持つてかれちました…」

「なんだあ？ 騒がしいな… オイ」

廃校舎からスキンヘッドの大柄の男が煙草をくわえながら出てきた。背中には大きなマシンガンを背負っていて、”いかにも”この賊たちの親玉という感じだ。

「ボス！…またあの狼が現れまし」

言い終わる前に、彼は銃を部下の頭に向けた。「ヒイッ」と小さな悲鳴が上がる。煙草を落として踏みつけながら火を消し、ジロツと部下に田を向ける。

「見りやわかる。今日こじて仕留めようじやねえか。早く追えよ？…それとも先にこの弾で頭冷やすか？」

「お、お、追いかけます！」

他の部下も慌てて裏山に走り始めた。ボスは放置された「箱」に田を向け、銃を撃つた。が、弾はそれに傷一つ付けられず、金属音

だけを立ててあちこちに跳ね返って散乱した。「箱」の電源もまだ入っているらしいが、操作できそうなものもない。近くに転がる蓋を腹いせのように蹴り飛ばした。

「何に使うのかねえ…狼野郎サンよ」

彼女は振り落とされないように白い毛に必死に掴まつた。不思議なもので、その狼は山の中を彼女を気遣うように走つた。枝にも当たりないし、振り落とさないよう足運びは滑らかだ。やはり、この白狼はただの獣ではないように思える。

山の中腹にある小屋まで来ると狼は止まつた。小屋は洗濯物が干されていたり、生活味が漂つている。誰か住んでいるんだろうか。この狼の飼い主だろうか。

次の瞬間、狼は座つてしまい、その背中を滑り台のよう滑つて地面に思いつきり尻餅をついた。

「あいたつ

訳のわからないまま狼に拐わってしまったが、とつて喰われる気はしない。振り返ると狼はじっと彼女を見ている。よく見るとシベリアンハスキーみたいで可愛いと思い、撫でようと近づいてみた。

「撫でるなよ。俺は犬じやないんだ」

「喋った！！」

アニメや漫画で大きな犬が喋る描写があるが、まさか生で拝めた

「」と、彼女は怖がるビビリか感動していた。

「…変な奴」

そう言つて狼の毛はするすると短くなり、 図体も縮んでいく。

「…」

白い毛が完全になくなる前に小屋の前に干してあるトランクスを履いた。そこにはパンツ一丁の白髪の青年が一人。

「人になつ…いや、 服着てください服！」

「いちいち煩い。 言われなくてもそうする

一緒に干してあつた白いシャツと黒いスラックスを履く彼に、 彼女は尋ねた。

「あの…」  
「…」

「俺の家」

「いや、 そういう訳なくて…」

「俺はヨキ。 お前は？」

まったく彼女のペースに合わせる気がないのか、 他の洗濯物もたまたまながら見向きもせずに会話を進めていく。

「あ…私は…キリヤ…ヒカリ」

「…キリヤ ヒカリ。間違いないな」

「え」

「何から説明すればいいかわからないから、事実から言つぞ。あんたが今いるここは、あんたが眠りについてから10年後。星歴1102年のアギュヴェリアだ」

## プロローグ 田覚め（後書き）

初連載モノです。気長に書くつもりなので、気長に読んでもらえた  
ら嬉しいです^ ^

## 10年の戸田とカヴァリーハーの青年

”アギュヴニア”それはヨキやヒカリが今いる国のことだ。4つの大陸に囲まれた、島国である。縁もあれば、都会には高層ビルが立ち並ぶ。世界には多くの国が存在しており、ほとんどが貿易や協定で繋がっている。少なくとも、空想の中の狼青年や山賊まがいの悪党がいきなり登場する世界ではない。ヒカリの記憶によれば。

「10年って……」

「あなたはさっきの箱から目覚めたら？　あの中で10年、歳を取ることもなく眠つてたんだよ」

さも当然のように彼は洗濯物をかごに入れながら言った。人間の状態でも高い背の彼は軽々と高いところに手を伸ばしていく。そして、混乱しているヒカリに親切な説明をする気はないらしい。

「ちよ、ちよっと待つて！　何で私が10年も眠つてなきゃならないの…？　それに家族や友達は…！…？」

ヒカリは戸惑うあまり声を荒げた。まるでＳＦのような話を初対面の相手から告げられ、信じじることもできずに気が動転していた。

ヨキはそんな彼女をため息を一つついてから、面倒臭そうに手を差しのべた。

「そんな地べたに座つて話すのもアレだろ。小屋入れ。茶ぐらいは出す

「…」

助けられたとはいえない男の家には入りたくなかった。ましてや人間なのかもわからない、得体の知れないやつ。丑つきも悪いし。

「勝手にしろ」

ヨキはそう言つと小屋に入ってしまった。

ここでいいなんて言ったものの、地べたに座るのはやつぱり嫌だったので、ワンピースの砂を払つて近くに倒れている木に腰掛けた。

「…なんなの、もう…わけわかんない」

ヒカリはイライラを鎮めるため、丑覚める前のことを思い出してみた。

私は21歳の夏を謡歌していた、普通の大学生。バイトして、友達と遊んで…。あれ? いつから記憶が途切れたんだろう。長い夏休みの、どこから途切れている?

「おい」

「…」

小屋から出てきたヨキが持っていたのはコップ二つと水の入った丸い水筒だった。二つのコップに水を注ぎ、一方を差し出す。

「ずっと眠つたままだつたんだ、体に入れておけ」

「あ…ありがとう」

自分より少し年上に見えるが、ずいぶんと上から田舎な親切だ。彼は加えて「毒なんて入つてないからな」と自身ももう一方のコップに口をつけた。

一口飲むと食道をひんやりとした感覚が撫でるように落ちていく。同時に、炭酸を一気に飲んだ後のよう胸が苦しくなった。

「…うつじまつ」

「少しづつ飲まないとむせるぞ。10年使ってなかつたんだからな」

確かに少しむせただけで、次第に普通に飲めるようになつてきた。10年、眠つていた…やはり本当なのだろうか。コップの水にいつもの自分の顔が映る。いつも見ている自分なのに。10年なんて私は三十路じゃないか。

「あの保存装置の不完全なところだ。知らずに食べ物でも入れるとみんな戻すらしい」

「…あなたは何者なの?何で私の事、知ってるの?」

さつきより落ち着いた彼女を見て、ヨキも小屋の壁に寄りかかりながらもう一度水を飲んだ。木漏れ日が彼のシルバーのピアスをキラキラと照らした。

「俺はプロトタイプの暗人アントをサポートするカヴァリエーレだ」

「プロトタイプ?アント…?」

「…とりあえず、暗人から説明した方がよさそうだな」

そう言つとヨキは近くの切り株にコップを置いた。

「簡潔に言つと『暗人』つていうのは超能力者や超人つてことだ。俺も狼に変身できる暗人だ。超能力者つて言つても、人工的に作られたもので、あんたは10年前のその試験体。そういうと人造人間とも言えなくないか…」

「あ、はは…超能力…ね…」

いきなりの話の飛びようにヒカリは頭が追いつかない。ヨキは顔色一つ変えずに話を続けた。

「10年前、違法に人体実験を行つてた科学者集団がいた。あんたは不運にもその研究対象に見事『選ばれてしまつた』らしい。何をもつて選んでいたかは知らないが、いつから記憶が途切れたか、正確には思い出せてないんじゃないかな？」

ヒカリはある夏の思い出は確かに覚えているが、詳細な日付などはまるで記憶にもやがかかつたように思い出せなかつた。朝起きたのかも、夜寝たのかも、いつこんなことに巻き込まれたのかも何も。

「9年前、この世界は戦火に包まれた。南大陸の大國ダグルと北大陸の大國ゼルティが同時に相手国を攻撃したのをきっかけに、『文明大戦』やら『新人類大戦』なんて呼ばれてる大戦があつたんだ。ひどいもので、世界のほとんどが無法地帯になつた。勝利者なんてのもいなかつた。あらゆる国が敗者になつた。今や世界は混乱と生存競争の渦中にある。この国も地域ごとに自治が行われているが、さつきみたいな賊…『荒賊』もほつたらかしだ」

「…大戦…戦争…？何よ、それ…」

「…そのままの意味。あんたが起きていた時代でも南北の大陸は折り合いが悪かつただろ？火種は色々あつたみたいだが…」

ヒカリは信じられなかつた。信じたくなかつた。信じたらあの日々はもうないのだから。戦争なんて信じたら、大好きな人々の存在が消えてしまつているかもしれないのだから。なにより、そんな現実味のないことを次々と言われてモ。

「暗人はその科学者集団がその戦争に備えるためか、戦争で使用する気だつたのかは知らないが、とにかくその大戦絡みで作られたそうだ。その初期段階で作られた試験体は不完全な所が多く、10年の冬眠を経て目覚めるよう保存されたわけだ。俺はその試験体を補助、ナビゲートする役目を与えた力ヴァリエーレ。つまり、あんたの護衛つてとこだな」

「…そんな話…」

「まあいきなり信じろって方が無理か」

確かに信じられないが、このヨキという青年が目の前で狼から変身したのも事実。夢なら覚めて欲しい、何回もそう思った。でも、夢にしてはひどくリアルで、眩暈がしそうだ。

同時に頭が追いつかないあまりに逆に冷静になつてている自分もいた。この青年が言つてること、確める方法を彼女は一つしか思い浮かべられなかつた。

「あの、私…」

ヒカリが言葉を放つた瞬間、ターンと渴いた音が耳をついた。まるで、銃声のような音が彼女の声を裂いていった。

## 10年の風景とカヴァリーニの青年（後書き）

説明がだらだらと…読みにくいところがあつたかもしません。  
次話からは色々動いていくつもりです。

## 赤い運命のボタン

「やつたか！？」

金髪のシンシン頭の男が興奮しながら言った。手には猟銃が握られている。傍にいたボスが手を擧げると後ろから男たちがゾロゾロと銃やバットなどを持ちながら茂みからのり出し、少し離れたところに見える小屋に向かつた。

「…ダメだな。当たっちゃいるようだが、逃げられます」

致死量を思わせない血痕と、倒れたコップの水が散乱しているだけ。ボスが静かに「小屋に火をつけろ」と言った。部下は笑いながら持っていた酒を小屋にかけ、マッチで点火する。みるみる木製の小屋は火の勢いを増し、朽ちていく。

「あの狼野郎…毎度俺達の邪魔しやがって…いい気味だぜ」

「お前ら、戻るぞ」

「え？ あいつら探さなくていいんですか？」

リーダーの男はニヤリと笑った。

「あいつらなら、俺達のアジトに向かうはずだ」

「ヨ、ヨキさん…」

ヒカリは恐る恐る名前を呼んだ。また、山を駆ける白狼の背中に  
掴まりながら。

「なんだ」

「血が…」

ヨキの足からは血がぽたぼたと流れている。木の枝や小石がぶつ  
かるたびに眉間に皺がよつた。

銃声が響いた瞬間、ヨキはヒカリをかばい、右腕に銃弾をかすめ  
た。そして、息もつかぬ速さで彼女をあの場から連れ出したのだっ  
た。

「大したことはない。かすめただけだ。それより、あいつらが戻る  
前に『箱』に向かう」

「え、なんでわざわざ…」

「あの『箱』にはあなたの能力のロックを外す安全装置があるんだ。  
あんたがアンロックしてたら、あの『箱』は自動的に解体して  
はず。本当は夜にでも行こうと思つてたんだが… こいつなつたらこの  
まま行く」

ヨキは高い崖も軽々とジャンプし、山をどんどん下りていく。  
方ヒカリはジャンプの度に「ひつ」と怯えながら、親にしがみつく  
子猿のように彼にしがみついていた。

そしてあつという間に先ほどの廃校に辿り着いた。人気はない。

“ひやらまだ賊たちは戻つてきていないよつだ。

「まつたく…あんな校庭のど真ん中に置きやがつて…早く済ますぞ」

「ひ、うん」

校庭の真ん中に置かれた「箱」にヨキは素早く近づき、ヒカリを降ろした。

「俺は見張つてる。中に赤いボタンがあるはずだ、早く探して押せ」「えつと…赤いボタン、赤いボタン…」

彼女は中に入つてボタンを探した。なんだか、いろんなネジやらランプやらがあつて探しづらい。ヨキは周りを伺いながら「まだか」とヒカリを急かす。

「ちよつと待つてよ、見つけづらいんだか」

ターンツー！

「一。」

銃声が上がり、ヒカリの横の地面を銃弾がえぐる。サーツと彼女の血の気が引いた。ヨキが唸り声を上げて狙撃先を探すと、屋上から獵銃を持った男がこちらを狙つっていた。

「おい、当てるんじゃねえぞ」

タバコや酒でかされたような低い声が聞こえた。先ほどのボスと

部下たちが銃を構えながら、校舎の裏側からゾロゾロと姿を現した。

「やっぱりなあ。あの箱、分解して金属売るつにも壊せねえし、まだ電源も入ったまま…いじくっても反応しねえ。何かしら用があつてまた戻つてくると思つたぜ」

ヨキが鋭利な牙を見せながら男たちを睨みつける。そして、小声で「早くしろ」とヒカリに叫つた。

「おつと、変な氣起こすなよ。いくら狼さんでも、娘さん連れて、その脚でこの銃の数からは逃げ切れねえだろ?」

「…」

「お前には散々俺達の邪魔してもらつたからなあ…近くの村襲いつのも、女やひつのも…正義の味方気取りかよ、この化け物が」

ヨキとボスが睨みつけ合つ中、ヒカリには冷や汗が流れていった。

「(……ない)」

赤いボタンがどこにもない。確かに箱の中にあると言つていたはずだ。でもない。目の前では緊迫した空気が張りつめている。こんな状況下で「ありませんでした」なんてとても言えない。というか、なかつたら命が危ない。

「そりだなあ…確か俺達がそれ…手に入れた時からだつたなあ…お前が現れたのも」

「お前等がこの『箱』に手を出したのが悪い」

強気なヨキの言葉に賊たちはいきり立つて「もつ撃つちまね」  
「なぶり殺してやる」と口々に叫んだ。

一方でボタンが見つからないヒカリは、賊を逆なでをせるヨキに  
やめてくれと心中で懸命に叫びながらボタンを探し続けていた。

「廃墟から出たモンは手に入れた者勝ちだろ…？荒賊ナメちゃあな  
らねえな」

ボスがショットガンを構えた。ヨキはヒカリを庇いながら「まだ  
か」とさつきよりも力を込めた声で尋ねる。

「…ヨキさん」

「何だ」

「おー、なにコソコソ話してるんだあー？蜂の巣になりてえのかー？」

賊たちは早く攻撃を始めたくてウズウズしている。ヨキもさすが  
にヒカリの身の安全が気にかかる。

「あの…ボタン…ない」

「…は？」

今まで賊から離さなかつた田線がヒカリに向いた。

「だから、ないんだつてば」

「バカ言つな。必ずあるだろ」

「ないものはないって言つてゐるじゃない！」

「見落としてるんぢやないのか？田悪いのかあんた」

「はあー…？」

ついには言い争いが始まってしまった。完全に茅の外の賊たち。しごれを切らしたのかボスが空に向かつて銃を打つ。その音に一人は思い出したかのように向き直った。

「ふざけるのもいい加減にしろよ…。その箱…金になると愈つたんだが…お前らも扱いがわからねえとは」

「…」

「ならお前に用はねえ。ひとつと殺しちまおう。なあに、死体はちやんとジローの野郎に見せしめにしてやるからよ」

ヨキはここで戦つ覚悟を決めたのか、足に力を込めた。ポタポタと血の滴が流れる。賊たちは待つてましたと言わんばかりに武器を構え始める。

「…」こいつには指一本触れさせない

「ハッ。なんだよナイト氣取りか？カツコつけてんぢやねえよー。」

銃口がヨキに向いた。

「俺は…そういう運命だ」

まるで厭世的な、嘲笑うような言い方だった。恐い目とは裏腹な、悲しそうな背中。そんなヨキの背中見ていたヒカリの視界に『箱』の蓋が入った。調べていないのはあれしかない。外側の部分が上になっている。もし、あれの内側にあるのだとしたら。

「じゃあ、運命とやらを諦めよ。惨めな狼さんよおーー。」

「のままじゃ、ヨキが死んでしまう。初めて今日会つた私のせいだ。なんで私を守る役目になってしまったのかはわからない。だってそれも聞けないほどに、短い時間しか経っていない。でも、この人は私の為に今まで身をいしててくれた。悪い人ではない。ここで死なせちゃ、だめだ。

引き金に手がかかつた瞬間、ヒカリは走り出した。撃たれるなら、最後まで希望を捨てずに撃たれた方がマシだった。それは、本能に近い衝動だった。

突然動いた標的に、賊たちの銃口はヒカリに向かう。ヨキは反射的に彼女を庇おうとしたが、脚に痛みが走り、彼女に追いつけない。

「ー、ヒカリー！」

彼女が蓋をひっくり返した瞬間、何発もの銃声が轟いた。

## 旅立ち

銃声の雨のあと、砂ぼこりが舞つた。ヨキは驚きと、困惑の眼差しでそこを見つめた。

「…ヒカリ…」

名前を呼ばうとした時、ヨキの後ろからガシャンと金属が崩れる音がした。振り返ると『箱』がただの鉄屑になつてゐる。

「な、何だあれ…！」

賊の一人が砂ぼこりを指差しながら声を震わせる。まるで恐ろしいものでも見るような目をしながら。

砂ぼこりが晴れると、不気味な黒い壁がヒカリを覆つようにそびえ、銃弾を全て受け止めている。そして銃弾は跳ね返る訳でも、反動で潰れる訳でもなく静かに地面に落ちた。すると、黒い壁がフツと消える。

そこには目を丸くして、腰を抜かしているヒカリがいた。怪我一つない彼女にヨキは安堵のため息をついた。

「…なるほど…その女も化け物つてわけか…お前ら、構わず撃て！」

ヨキはヒカリに駆け寄り、背中に載せた。

「さつきのがあなたの力か？」

「…く？」

まるで他人事のようなヒカリ。どうやら無意識でやつたらしい。ヨキはヒカリに「あの壁、俺」と張れ」と静かに言った。

「え、ちょ…そんな張れって言われてもやり方が…」

「大丈夫だ。特別なことじゃない。あんたは歩くのを意識したりしないだろ。それと同じだ。いいから早くやれ」

最後の一言に力チンと来つつも、ヒカリが前に手をかざすと黒い壁がまた現れた。銃弾は同じように壁に阻まれ、落ちていく。

ヒカリは不思議な感覚を味わっていた。

初めてすることなのに、自然にそれができる。ヨキが言った通り、壁の作り方をそう意識しなくとも出来てしまつ。なんだか少しだけ恐ろしいとも感じた。

壁は外から見ると真っ黒だが、内側からは黒く薄い膜を張つたよう比較的ハツキリと周りが見える。

「走るぞ」

そう言つとヨキは賊にむかつて走り出した。黒い壁を纏つて突進していく一人に、賊たちは情けない声をあげて散り散りに逃げ惑つた。

「ヒイイイ！」

「あ、馬鹿野郎！逃げるなああ！」

ボスは絶えずマシンガンを撃つが黒壁の前では全て無駄弾に化してしまつ。弾も切れ、前を見ると得体の知れない壁が猛スピードで迫ってきた。

「う、うわああああーー！」

頭を抱えてうずくまる彼の頭上をヨキは軽々と飛び上がった。そのまま賊たちをかわし、ヨキとヒカリは廃校の周りの林の中へと消えた。

唚然としながら立ち尽くす賊たちは恐る恐る、うずくまるボスに近づいた。

「だ、大丈夫ですかボス…」

「…」

「…ボス？」

スキンヘッドの強面なボスは白目を向いて情けなくも、気絶していた。

「ここまで来れば追つて来ないだろ」

ヨキはある程度人が通れるくらいに舗装された道に出た。倒木や土砂で荒れではいるが、おそらくかつては車も通っていたようだが、やつと曲がり、一部だけ残したミラーに一人が写っている。

「私、もう一人で歩けるよ」

ヒカリは背中から降りると、まじまじと自分の手を見た。さつきの黒い壁を自分の意思で操れると思つと、なんだか気持ち悪い気もした。

「ずいぶんと特殊な力だな」

「……そつ…なのかな」

他の力なんてヨキしか見ていないのでなんとも言えないのだが。なんとなく、ヒカリは近くにあつた木に向かつて手をかざした。黒壁が現れると、かざした手を握つて、何かを離すように手を開いた。

バキィイツ！

「！」

「わ…」

一瞬にして木が数本吹き飛ぶ。驚いたヒカリは思わず手をひっこめた。

「今のは何だ…？」

もう一度同じ事をしてみるが、何も起こらない。

「おやらくだが…衝撃を防ぐと同時に受けた衝撃を放出できるのか

不思議そうに手を開いたり握つたりして、ヒカリはきょとんとしている。

「…まだまだ操作には不安がありそうだ

ヒカリは、どこかでこの力を使つた気がしてならなかつた。こんな風に手をかざして操つていた。この力を、誰かに向けて。誰に向けた?誰かに…攻撃を…。

「おい」

「! 何?」

「どうするんだって聞いてるんだ、これから」

「あなたは…家…やつきの小屋に帰らないの?」

「あんなのは家じやない。あんたを監視する為の仮住まいだ。俺に家なんてない。俺はあんたのカヴァリエーレだ。あんたに付いて行なられてしまつたし。

く

困つたようにヒカリは頭をかいだ。付いて来てくれるのは安心なのだが、こんなに大きい狼一匹はたいそう立つだろ? 全部委ねられてしまつたし。

「…とりあえず、近くに町みたいなところないかな?そこに行つてから色々考えたい」

更に加えて「あなたの怪我も診てもらわなきゃ」と、傷を指差した。

ヨキは何も言わずにため息をつくと、ヒカリが持つっていたショルダーバックを鼻でこづいて「開けてみろ」と言つた。そういうえばつかり中を見るのを忘れていた。開けると、携帯電話のような手の

ひらサイズの液晶の機器が最初に出てくる。

「ケータイ？」

「あいにく電波塔もまちまちにしか整備されていないから、ほとんど電話は使えない。画面に触れてみる」

指を画面に当てる。地図が立体映像で浮き上がった。東西南北の4つの大陸と、そのほぼ真ん中に位置する小国アギュヴェリア。ヒカリがびっくりしていると、ヨキが「グザニア」とつぶやいた。地図がアギュヴェリアの北部、グザニアにズームアップされた。一つの赤い点が点滅し、その近くには青い点が大小バラバラに映っている。

「ヨキ、グザニアなの！？」

ヨキは「言つてなかつたか？」と言しながら、説明を続けた。

「赤い点は俺達のいるところだ。青い点は町・自治区。とりあえず、人もいるし物資もある。一番近いのは、この大きい点の『自治区七の空』だな。夕暮れには着くだろう」

そう言つとヨキは再び歩き出した。ヒカリもバックを閉めて付いて行こうとした時、バックの中が見えた。水や軽食、ハンカチ。ヨキの応急処置にいいものがあつたとハンカチを取り出すと、その奥に一丁の拳銃があつた。何も言わず目を見開いて、歩みを止める。

「どうした、行くぞ」

「ヨキさん……私は……これから戦うの？」

ヨキが振り返るとヒカリが真っ直ぐ彼を見ていた。悲痛と不安が混じる眼差しを、冷たい視線で返しながら口を開いた。

「そういうこともあるだろ？」「…」

自分がさつきみたいな力を人に使つたらどうなるんだろう。人がさつきの木みたいにぐしゃぐしゃになるのかと思うと恐かった。

「それが嫌だっていうなら死ぬかもな」

彼女は眉間に皺をよせて下唇を噛んだ。人が死ぬのは嫌だし、自分が死ぬのなんてもつと嫌だ。

「…幸運にもあんたの力は身を守る力だ。俺が戦うし、あんたは死ない。心配するな」

そう言つてヨキは前を向きなおした。

「あのー。」

ヒカリはショルダーバックの紐を握りしめながら叫んだ。

「これから、よろしくお願ひしますーー。」

そして小さく「ヨキさん」と付け足した。ヨキは振り返りはしなかつたが、少しだけ笑っていたような気がした。

「…その”さん”はやめてくれ。ヨキでいい」

「…ヨキ。じゃあ、私にも”あなた”って言わないでね」

「…わかつたよ。早く来い、ヒカリ」

ヒカリは小走りでヨキの隣に並んだ。「手当してあげる」とヨキの脚にハンカチを巻いて、ヒカリは笑った。不安を忘れるかのように。

不安でならない。何も知らないことばかりだということも。ただ、この大きな白狼はどうやら私を助けてくれるらしい。  
考えなければならないことが沢山ある。それを考えるのは、この世界を見ながら考えることにしよう。

だつて、まだ私は一人ではないのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3753t/>

---

閲人 アント

2011年10月9日02時45分発行